

大学と地域が協働する子育て支援者研修の成果と課題

－「にいみ子育てカレッジ」2013年度の取組より－

三好 年江*・片山 啓子

新見公立短期大学幼児教育学科

(2014年11月19日受理)

本研究は、大学・地域・行政で組織される「にいみ子育てカレッジ」事務局メンバーが企画・運営する子育て支援者研修会の成果と課題を明らかにしたものである。研修会に参加した子育て広場等の支援者は、「情報交換の大切さ」や「研修会の意義」を実感している。研修会の開始当初は、「イベントの内容」など運営についての関心が高かったが、現在は親と子どもの育ちや背景となる生活を視野に入れた「支援の在り方」についての関心が高まり、積極的な「研修の要望」が出るなど、支援者の「学ぶ意欲や姿勢」が顕著になった。また、カレッジ事務局メンバーについても、子育て支援における自身の専門性や職業役割を再認識し業務への意欲につながっていることが窺われる。課題は、研修会主催者と受講者の枠を超え、一人一人が支援者としての当事者意識を持ち協働しながら能動的に学び続ける研修会の在り方である。

I 研究の目的

新見公立短期大学では、2008年4月に大学と地域の協働による子育て支援「にいみ子育てカレッジ」^{※1)}(以下、カレッジ)を設立し、行政や地域の様々な機関、関係者等多様な構成員を持つ運営委員会や事務局を中心に事業の企画や運営に関する協議を行ってきた。その事業の一つに、「子育て支援者等連携・育成」があり、地域の子育て支援者等の研修を継続的に行ってきた。地域子育て支援拠点(以下、拠点)で親子と直接関わる支援者や関係機関に従事する者がつながり、親子の実態等を理解しながら、子育て支援について学び合う研修は、地域全体の子育て支援力向上につながり重要だと考える。2011年から始まった研修では、当初は「情報交換の意義」は感じるが、「ひろばで親子が楽しく過ごしてくれればよい」「子育て支援を学問的に示すことには抵抗がある」「実践となると難しい」などの声が聞かれたり、「どのようなイベントを行うか」等に関心が向けられたりしていた。しかし、現在は、徐々に子育て支援の質の向上に繋がるような「気づき、学び合う」研修になりつつある。

そこで本研究では、2013年度のカレッジ子育て支援者連携育成事業に着目し、間接的な支援者であるカレッジ事務局の構成員^{※2)}(以下、間接的支援者)が、地域に点在する拠点の支援者(以下、直接的支援者)を対象に行ってきた研修会の成果と課題を明らかにしたいと考える。

II 研究方法

1. 期間：2013年8月～2014年2月
2. 対象：8月1日、12月10日、2月4日計3回の以下研修会参加者を対象とする。
 - ①間接的支援者：市の行政関係者2名、県職員2名、社会福祉協議会1名、主任児童委員1名、カレッジ事務局員1名、大学事務局員1名、大学教員3名
 - ②直接的支援者：A広場支援者1名、B広場支援者1名、C広場支援者2名、D広場支援者2名、E広場支援者2名、F広場支援者6名
3. 方法：研修後に行なう直接的支援者への自由記述式アンケートをKJ法にて分析する
間接的支援者については、研修会終了時の感想(口述)を整理し成果を抽出する。
4. 倫理的配慮
対象者に本研究の趣旨を口頭にて説明し同意を得た。調査結果などについてはカテゴリー分析を行い、個人が特定されることがないことを説明した。

III 子育て支援者研修会について

1. 子育て支援者連携育成事業
カレッジが取組んでいる6事業の一つである(図1)。本事業の目的は、地域の子育て広場等で活動している子育て支援者の情報交換、連携や研修の場を設けることによ

*連絡先：三好年江 新見公立短期大学幼児教育学科 718-8585 新見市西方1263-2

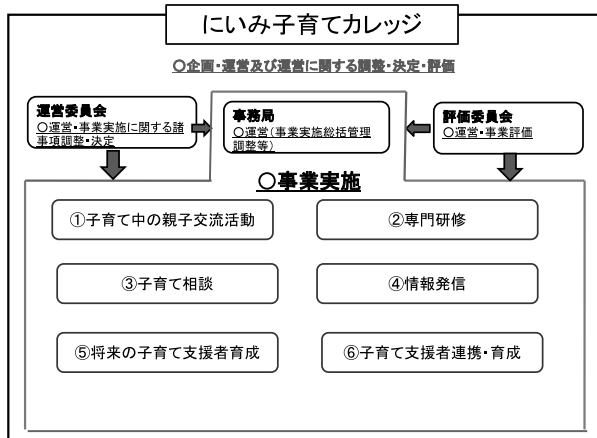


図1 にいみ子育てカレッジの組織図と6事業の内容

り子育て支援の質向上及びネットワーク化を図ることである。事業の内容は、各種研修会や講演会等の実施、外部研修会や勉強会への参加、他機関との情報交換などである。

2. 研修会の目的

地域に点在する拠点に従事する子育て支援者と、大学・地域・行政など子育て支援関連機関の従事者が、協働することにより地域の子育て支援力を向上させることである。

3. 研修会の方法

1) 間接的支援者について(実施者)

間接的支援者は、子育てカレッジ事務局会議にて研修会の年間計画および直前の実施計画等について検討する。詳細な研修会実施前後のプロセスや内容は以下の通りである。

- ・年間計画では、前年度の研修の成果や課題を踏まえ更なる質の向上を目指すためにどのような内容が必要か協議して各回の研修テーマを決定する。

- ・研修会の実施1か月前に事務局から直接的支援者に質問紙を送付する。

- ・研修会の開始までに質問紙の回収を行い、内容の整理および研修プログラムを作成する。質問紙のまとめは研修会資料として当日全員に配布する。

- ・間接的支援者は、研修会のテーマや内容により、各自が役割(講座の講師、司会、記録、進行、挨拶、レクリエーション係、コーディネーターなど)を受け持つ。

- ・1回の研修会の時間は、1時間半～3時間と幅があり、研修会の内容によって実施時間は異なる。間接的支援者は、実施者であり研修会参加者でもある。直接的支援者と同様に研修会に参加する。研修会終了後は、直後や次回事務局会議にて研修会の振り返りを行う。

2) 直接的支援者について(受講者)

直接支援者は、研修会の案内と同時にカレッジ事務局から送付された質問紙に回答する。

質問内容は、主には①子育て支援に関わってよかったこと(喜び)②困っていること、③他の人に聞いてみたいこと④自身の広場の課題と思うところなどの4項目である。当日は、間接的支援者の計画したプログラムに沿って研修を行う。研修会が終了すると、研修について振り返る。

4. 研修会のテーマと内容

2013年度	日時	テーマ	内容
第1回	8/1	これからの拠点に求められること ～新制度を学ぶ～	行政によるミニ講座 ⇒情報交換⇒振り返り
第2回	12/10	子どもの育ちと親の育ちに寄り添うために ～課題を通して考える①～	大学教員によるレクレーション⇒質問紙をもとに 情報交換⇒座談会
第3回	2/4	子どもの育ちと親の育ちに寄り添うために ～課題を通して考える②～	昼食会⇒テーマに沿った 座談会⇒大学教員による まとめ

III. 結果

1. 研修会の成果

以下、直接的支援者と間接的支援者の研修会の成果である。直接的支援者については、3回分の振り返りシートをKJ法にて分析した。間接的支援者については、研修会後の感想(口述)の記録を整理した。

1) 直接的支援者

研修会の参加者は、第1回目が9人、第2回目が10人、第3回目が8人であった。延べ27人分の振り返りシートを分析した結果、成果に関する記述が50コード抽出され、5つのカテゴリーに分類された(表1)。その内容は【情報交換の大切さ】が最も多く15件、次いで【支援内容への気づき】が13件、【研修の意義】が11件、【学びへの意欲】は6件であり、【研修についての要望】は4件であった。文中では、カテゴリーを【】サブカテゴリーを〔〕サブカテゴリーに対する特徴的なコードを「」で示す。

2) 間接支援者

間接的支援者である大学・地域・行政は、研修会を振り返り以下の感想を述べている。成果として捉えられた箇所を下線で示している。

大学は、「地域の実態や具体的な事例を知ることで協働の中での自身の役割や大学が発揮すべき専門性が明確になってきた」や「大学内部の関係者等に対してカレッジの理解が進むような橋渡しをしたい」と振り返っている。

地域は、「赤ちゃん訪問などを通して、県外からの親は特に話ができる場や繋がりを必要としている」と実態を把握する中で、「自分の役割として個々の親への細やかな対応を心掛け広場の紹介を行うなど関わりの充実を図りたい」と述べている。

行政は、「研修会の中でミニ講座を引き受ける機会を得

表1 直接的支援者の研修会参加における成果

カテゴリー	サブカテゴリー	主な内容
情報交換の大切さ(15件)	安心感を得る(5件)	具体的な話から、一人だけの悩みではないことがわかってよかった。
	今後に生かす(6件)	一つ一つの課題点をあげ、色々な事例をあげての意見を聞いたことがとても勉強になった。今後に生かしていきたい。
	自己の振り返り(4件)	情報交換を行い、広場運営について「このままでよいのか」と考えていたところだったので参考になった。頑張っていた。
支援内容への気づき(13件)	新たな視点の獲得(7件)	支援者は指導者ではなく「一緒に考えていく人」ということを聞き、これからも色々な利用者さんと話をし色々考えていきたいと思った。 親と子どもの行動に対して「こうしたらいのに」と思うこともあるが、その親子の生活に触れてみると「なるほど」と一つ一つの行動に意味があるので、そのことを理解して考えてみたいと思う。
	支援の偏りや不足(4件)	広場で求められている者として、今までは母親に視点が当たっていた部分が改めて子どもへの気持ちを入れて考えなければと「はっと」させられた 企画などを通して子どもが満足しているかについてもっと考えてい必要があるように思った 子どもの育ちへのその思いが先行し過ぎて、共感するとか親子を理解する気持ちが足りないのではないかと反省した
	支援の再確認(2件)	共感的に理解しながらも支援者は指導者ではなく気付いたり気づかせてあげたりしながら、背伸びしないよう来年度も若い母親の相談相手になりたいと思った
研修の意義(11件)	意見交換の必要性(3件)	細かな話し合いの研修会で得るものが大きかった
	協働のメリット(3件)	地域との交流は広場だけからの働きかけでは成り立たないけど、研修会の場でどんどんつながりを強化すればどんどん新しいことにも取り組める 短大の専門的な立場の先生方や主任児童委員の方々がおられることはとても心強い
	研修会での刺激(1件)	いつも刺激を受けている
	研修への感謝(4件)	これからもこのような場を設けていただけたとありがたい
学びへの意欲(6件)	制度(3件)	制度改正について今後ますます勉強していきたい
	自分が成長する(3件)	親の育ちを求めるときに、まずは広場に携わっている自分自身を高めなければと改めて感じた 日々成長していかなければいけないのは自分自身だと思った 来年度に向けて、もっと研修などをよりよい広場にできるように自分が努力したい
研修への要望(4件)	自由な話し合い(3件)	一つ一つの質問に色々な答えが出てきたが、ちゃんとした意見を言わなければならぬ雰囲気もあり。もっとたくさん意見交換したかった。
	時間の確保(1件)	時間が短く感じる。もう少し長くてもいいのでは。いつも勉強になっている。

て子育て支援に関する資料を準備したり改めて制度の勉強をしたりと、自分自身気づき学ぶことが多かった」と述べている。また「地域の子育て支援における市の役割が明確になった」とも述べている。その他、「研修会では子育て支援における自身の機関としての役割とは何かをいつも考えている」と「現在の事業内容を見直したい」「家族間の調整のためにも積極的に広場を紹介したい」と述べ、それぞれが自身の業務について改めて見直しをしたり意欲を高めていることがわかった。

VI. 考察

1. 研修会の成果

感想として最も多かったのは「情報交換の大切さ」であり、具体的には「具体的な話から、一人だけの悩みではないことがわかってよかった」と「色々な事例をあげての意見を聞いたことがとても勉強になった」と、情報交換を通して同じ立場の支援者と思いを共有し、親しみや安心感の中で具体的な事例を出し合える関係性を築いているこ

とがわかる。また、「各広場の活動、様子、悩み等を聞き、ひろばのスタッフの意見も聞いて色々な面で解決できたように思う」と自身の取組の見直しにつながりしている。このことから、単に情報を交換するだけではなく、自身の取組の振り返りや明日からの活動への意欲や反映につながっていることがわかる。

2011年度から始まった研修会であるが、開始当初は「子育て支援を学問的に示すのは抵抗がある」と「できれば参加したい」など研修会について消極的と思われる意見が見られた。しかし、2013年度の研修会では「地域との交流は広場だけからの働きかけでは成り立たない」「研修会の場でつながりを強化すればどんどん新しいことにも取り組める」と研修会に期待する声が聞かれ、「短大の専門的な立場で指導して下さる先生方や主任児童委員の方々がおられることはとても心強い」など、様々な立場の人が協働で行なう「研修の意義」を実感しており研修に対する考えの変化が見られるようになってきた。

また、「支援内容についての気づき」も深まっていることが分かる。当初は、「ひろばで親子が楽しく過ごしてくれればよい」と「どのようなイベントを行うか」など子育て支援の本質に関することというよりは、表面的な捉え方にとどまっている感が否めなかった。「親子の生活に触れてみるようになるほど一つ一つの行動に意味があり、そのことを理解し関わりを考えてみたいと思う」と「子どもの育ちへの思いが先行し過ぎて共感するとか親子を理解する気持ちが足りなかったのではないかと反省した」など親子を共感的に理解しようとする記述が見られるようになっていく。更に、「支援者は指導者ではなく気付いたり気づかせてあげたりしながら、背伸びしないよう来年度も若い母親の相談相手になりたい」と拠点スタッフの役割である身近な相談者としての意識を再認識している。

さらに、制度や子育て支援、親子への理解を深めたい等「学びへの意欲」が見られる。特に大きいこととして、間接的支援者である行政職員から制度に関するミニ講座を受けたことにより、これまで目を向けられていなかった新制度に関する興味関心が高まり、「今後ますます勉強していきたい」という声や「親の育ちを求めるときに、まずは広場に携わっている自分自身を高めなければと改めて感じた」という「学びへの意欲」が見られるようになっていくことである。直接的支援者は、準備された研修会に参加する形式になっていることから受講する人であり受け身の存在であったが「もっと自由に語り合いたい」と「時間が足りない」など「研修への要望」がでるようになっていくことは、学びの意欲と連動して支援者としての意識の高まりを見ることができ研修会の成果と言える。

本研究では、直接的支援者だけでなく間接的支援者についても研修会の成果が確認された。協働型の研修会では、企画・運営はもちろんのこと、1回毎の研修会では間

接的支援者のほぼ全員が役割を持つ。2013年度においては、市行政職員がミニ講座を受け持ち、改めて自分の業務に関わる内容について勉強したり期待されていることを実感したりで支援者としての当事者意識を高めている。また、直接的支援者の現状、地域および親子の具体的なニーズや課題が見えてきて、現在の自分の業務を振り返り専門性の再認識を行う契機になったり、新たな取組への意欲が見られたりしている。

2. 研修会の課題

現在、様々な調査や研究等を通して、子育て支援者の専門性が明らかにされつつあると同時に、支援の質向上に対する取組も大きな課題として注目されている。研修の重要性は言うまでもなく、各種団体において子育て支援者の養成講座や段階別の研修プログラムなども開発されている。カレッジは、今年度より、N市より市内唯一公設である子育て支援センターの委託をうけ、名実ともに本地域の子育て支援を中核的に担っていく機関となった。そこで、これまで以上にN市内に点在する親子交流ひろばの支援の質向上を目指し、親が育ち、子どもが育ち、子どもを産み育てることに喜びが持てる地域づくりについて積極的な取組が求められる。このことから市内の全子育て支援者が参加する本研修会は、大きな意味を持つ。また、研修会の企画・運営をカレッジ事務局メンバーである子育て支援に関連する機関の従事者が協働で

行うことも重要な意味を持つこととなる。

2013年度の研修会を振り返る限りにおいてはある一定の成果が見られたと考える。しかし、「研修会を開催してもらってありがたい」という[感謝]や「もっとたくさん意見交換したかった」「もう少し時間が長くてよいのでは」と【研修会に対しての要望】が挙げられており、直接支援者にとってはまだ与えられた受け身の研修会であることが窺われる。間接的支援者についても、研修計画等に関わってはいるものの、まだ全員が自分の専門性を十分発揮しながら協働できているとは言い難い。今後は、研修会を開催する人、受講する人という関係ではなく、自由な雰囲気の中で研修計画やテーマについて共に考えたり課題の整理を行ったりなど間接的支援者と直接的支援者間に協働する関係が形成されるよう工夫を行っていききたい。そして、一人一人が地域の子育て支援者としての当事者意識を持ち自身および地域の課題を明確にしながら能動的に学び続ける研修について探っていききたい。

文献

注1)「おかやま子育てカレッジ」第1号 新見モデル

注2) 行政(新見市および岡山県職員)、地域(主任児童委員・社会福祉協議会職員)、大学教職員